



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.188  
2019.5.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第27回 ● 「沼部式」から「御所見式」へ

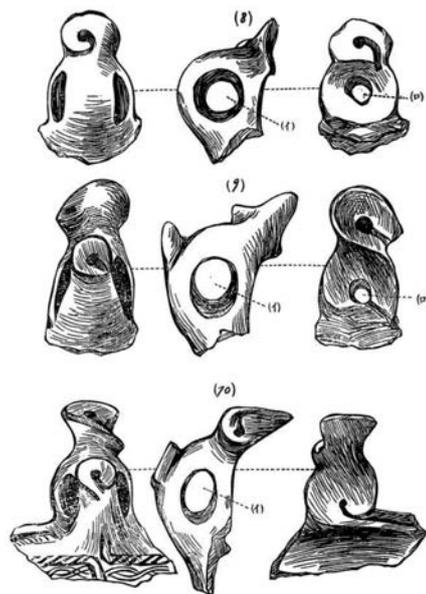
沼田頼輔の「沼部式」把手4個体は、形態・装飾の特徴から2系列に集房化され、(1)と(3)の「球形頭部縦横刻文系列」、及び(2)と(4)の「扁平頭部螺旋文系列」に分類される。「球形頭部縦横刻文系列」では(3)の把手上2段突起の頂部球形の「縦横の刻み目」装飾に注目するならば、2段構成が1段に縮小し小形化しつつも「縦横の刻み目」が残存して(1)の形成に至る変化が指定されるが、(1)では頂部の「∞」状浮文も注意される。「扁平頭部螺旋文系列」では(4)の把手上の螺旋文により作出される扁平板に大きめの球形突起を付し、頭頂部には螺旋文を施す扁平板を付加、内面にも凹点文の周囲を「S」字状の板面とする等装飾的な形態に特徴があり、別に外面の把手上に「∞」状浮文が見られる。全体を精巧に装飾する作法は(3)と共通し、両者は年代的に同時の2系列と指定される。(4)から球形突

起を省略し、**装飾螺旋状突起**が平板と結合すると(2)に至る。刻文や内面にも(4)の名残が残存し、**把手上突起の縮退と簡素化**は(1)への変化と共通し、年代的同時性を指定する。

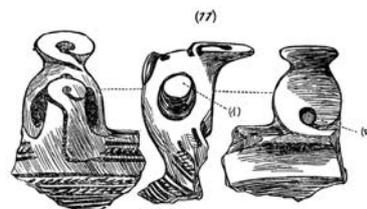
こうして「沼部式」把手は**緊密な並行関係を有する「球形頭部縦横刻文系列」と「扁平頭部螺旋文系列」**の2系列から構成され、前者は(3)→(1)の変化が、後者も(4)→(2)の変化が指定されるが、坪井正五郎のアルゴリズムでは全形が窺える文様帯で事前に型式学的な検証を必要とする。『大田区史』と『取手と先史文化』が突起よりも**体部文様帯の変化を優先**する所以である。

このような「頭部に複雑なる装飾」の「沼部式」に対し、「沼部式と最も密接の関係を有する」**把手形態**(「側面に孔を有せることと亦其の裏面にこれと直角に共通せる孔を有せることは全く相一致せり」で、かつ「時として」「頭部に複雑なる装飾」「を欠き其のこれあるものも極めて単一なる螺旋状を呈するに過ぎず」として「御所見式」把手と命名されるのは、第31図(5)(6)(7)、第32図(8)(9)(10)、第33図(11)の7例である。命名は「沼部式」とは由来を異にし、(11)の「相模國高坐郡御所見村大字持田の包含層より発見したる把手の此の形式に属する把手中最も精巧なりしより特に此の名を取りて以て此式を代表せる名称となせるなり」と述べる。

「御所見式」把手を分析する鍵語は(11)に



▲第32図 螺旋状の突起と凹みの「御所見式」



▲第33図 「御所見式」の中で最も精巧な把手

与えた「最も精巧」という評価である。把手の頭部・腹部・背部に螺旋状の突起や凹みを配する装飾形態は、「沼部式」把手の(2)と「最も密接な関係」が見て取れる。(2)は「沼部式」把手特有の刻文装飾を頭部に施文するが、頭部の突起自体は螺旋状を呈しており、刻文が廃れて螺旋状の突起や凹みが主体となる変化を指定するならば、(2)→(11)の順序が指定される。このように把手の土台となる形態は殆ど変化せず、付加する突起の装飾・形態が分断されずに変化する現象に連続的なシーケンスを観るならば、個別の変遷に留まらず、「沼部式」把手から「御所見式」把手への**変遷**をも指定することになる。

更に「御所見式」把手も突起の装飾から略2系列に集房化され、(9)(10)(11)のように頭部に加えて背部にも螺旋状突起が発達する「**背部／頭部2段螺旋状突起系列**」、及び(5)(6)(8)のように背部に突起を配さない「**頭部螺旋状突起系列**」に分類される。「沼部式」把手に観る2系列は同じ年代の並行系列関係が考察されるが、では「御所見式」把手の2系列はどうであろうか。

既に導出した(2)→(11)の順序から、「背部／頭部2段螺旋状突起系列」は(11)を始点として変化を観る視点が獲得され、(11)→(10)へ背部突起の形態変差が認められ、(9)は(10)に近い。これに対して「頭部螺旋状突起系列」の(8)は(9)の背部突起が省略され、更に頭部突起の簡素化に注目すると(8)→(6)→(5)の変化が追える。こうして「**背部／頭部2段螺旋状突起系列**」→「**頭部螺旋状突起系列**」という時系列変化の導出に至るが、本来の検証は**体部の文様帯を俟つ**ことになる。尚、背部突起が剥落した(7)は(10)が簡素化した変化であり、背部突起が残存しつつも(8)に並行する例であろう。

\*巻頭連載は隔月です。次回は 大村裕 さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 「沼部式」から「御所見式」へ(第27回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第20回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第181回) 吉松優希 …3  
■考古学者の書棚 「手仕事の日本」 松岡千寿 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第20回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

## 5. 富比売の出現(天平宝字七年銘の墓地買地券)(3)

先回は、倉敷市真備町で江戸時代に出土し「矢田部益足之墓地買地券文」と称されてきた資料を再検討した結果の、新たな釈文を示した。その中で、人名に当る「白髪部毗登富比賣」のなかの「毗登」部分が、この博製品が、当時の天平宝字七(763)年のものに違いない強い証明になる、と岸先生から指摘されたことをのべた。

実は釈文検討中、この文字に行き着いた時、私どもは何も知らず、この文字が一番合理的だったのである。強いて言えば、奈良時代の人名で、こうした文字のあることは、一応知ってはいたのだが、とりたてて気にもしてなかった。仕事柄『続日本紀』などは開く機会は多かったから目にしていたというぐらいのことであつた。むしろ私たちが全く知らないようなことが、当時のものといえる証明でもあつた。

ただこの「白髪部毗登富比賣」の人名は、古くには誰も気付かなかつた名前であり、今一度古くから言い習わされた読みと、再検討の読みとを対比しておく必要があるだろう。そこには互いに、文字として似た字画もあり、また読む側の思い込みなどのある怖さも窺えるだろう。

江戸時代以来の読みを集約したものとして、1930年出版の永山卯三郎著『岡山県金石史』示す。以下の対比は一行おきに古い釈文と、今回の釈文を並べているが、両者の下線部分や文字空白部分に注意

- (旧) 備中国下道郡八田郷戸主矢田部益足戸白馬飛部  
 (新) 備中国下道郡八田郷戸主矢田部石安口白髪部  
 (旧) 田兆宮作買之墓地以天平宝字七年 癸卯十月  
 (新) 毗登富比賣之墓地以天平宝字七年々次癸卯十月  
 (旧)(新) 十六日八田郷長矢田部益足之買地券文

これを本体の文字実態で詳しく見ると、1行目の人名は、「益足」とは絶対読めない。これは最後の買地券文の人名に引かれての思い込みで、詳しく見てない結果といえる。

また「富比賣」を「宮作」としたので「賣」の土を取って「買」としてしまっていたが、これは誰でも普通に見ると明らかに「賣」字なのである。「作」字もよくみれば「比」である。古代の文字で「比賣」が女性につく文字であることを、江戸時代末頃からの郷土史家や歴史学者が知らないはずはないが、買地券などに女性名が出るなど、当時の学者には思いつかなかつたこともあつたかもしれない。この意識的な読み違いが、意味の通じぬ文面となり、この貴重な資料を、長く偽物視する原因となつたとも言える。

ここで実は私たちの心配は「富」さんなのか「宮」さんなのか、個人名でもあり、大変読み辛い部分だったのだが、二面を付き合わすとどうしても「富」さんのようであり、富比賣で公表した。だが基本的に最も大切な部分の文字には、間違いのないつもりだった。

この富比賣の墓地買地券が、市民権を得るきっかけとなつた、わが国では唯一の発掘資料である、太宰府市宮ノ本遺跡出土の墓地買地券には、比較のためにも触れておこう。

この宮ノ本遺跡は、大宰府政庁の西南2、3kmの地にあり、1959年に地元の小中学校建設地として調査された。古墳時代から、奈良・平安時代にかけての多数の墳墓も発見され、その

中で火葬墓にともなつて墓地買地券も出土した。この墓では、火葬骨は木箱に納められ、周辺には方形に石積みがあつた。買地券は鉛板で厚さは2mmばかり、短冊形、長さ35.2cm、幅9.5cmで文字は墨書されていた。

解説の困難な部分も多いため、現代の文字に直したが、一応、原文は下記のようなものだろう。(・は文字不明部分)

「・・戊・死去為其・坐男好雄・縁之地自宅・・方有其地之静寂四方・・・可故買給方丈地其直錢貳拾五文銀一口絹五尺調布五・白綿一目、此吉地給故靈平安静坐子々孫々・・・全官冠・録不絶令有・七珍 白」

少々分かり辛いが概要は「〇〇日に死去した人物の息子好雄が、死者の霊が休まる静寂地を一定の値で買い取つた。ここに埋葬された者の子々孫々までも栄えるように。」ということであろう。

富比賣墓地買地券とはかなり違っているが、これは富比賣のほうが、中国の買地券とはかなり違っている為で、宮ノ本のほうが、中国の本格的なものによく似ている。

中国での古い時期の墓地買地券についての説明は、先に示した『倉敷考古館研究集報 15号』の岸先生の論考を見ていただければよいのだが、その中の簡単な事例を示しておこう。これは東京にある、「台東区立書道博物館」の藏品である。

「建寧元年二月五風里番延寿墓前」(後漢168年の物)

元年九人従山公買山一丘、於五風里葬父馬衛将、直錢六十万即日交畢、分置券壹合前大吉立右、建寧元年二月朔、有私約者当律令(「」内は題名、前は1枚の券文を二分する意味。これは博製品だが、中国では鉛板製も多い)

この意味は「山公(土地の神)から山一丘を父馬衛将を葬る為に、60万錢で買った。2分して分け置いた券を合わすと、大吉。これは律令にある」のようだが、最後の言葉は「如律令」のような文字で以来長く、まじない、トイなどの後に付く言葉となつて、わが国でも現れている。これを見ると宮ノ本例のほうが、中国の事例に、より近い。中国では、基本は墓を買う相手は、常に土地神で、現実の土地所有者ではない。値段も、架空で法外の値段で、墓の地は死者が買い、立会人のいる場合も多いのである。富比賣の墓地買地券をどのように考えるべきか。

## 間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる  
 1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
 1955年 岡山大学法文学部法学科卒業  
 1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員  
 1973~2006年 同上館長  
 1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講  
 1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講  
 2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる  
 1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
 1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業  
 1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)  
 1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員  
 1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)  
 1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授  
 1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

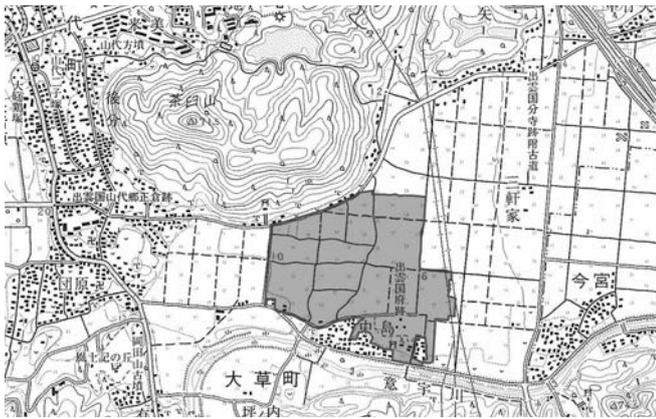
## Uレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 181

## 史跡出雲国府跡 ～島根県松江市

吉松 優希

私が紹介するのは、島根県松江市大草町に所在する史跡出雲国府跡(以下、出雲国府跡)である。出雲国府跡は、北の茶臼山、南の意宇川に挟まれた意宇平野に立地し、約420,000㎡が国史跡に指定されている。ほぼ完本として現存する唯一の「風土記」である『出雲国風土記』は奈良時代の出雲国の様子を示し、新造院や正倉、官道や渡、山など豊富な記載がある。出雲国府跡の北側に所在する茶臼山も「風土記」には「神名樋野」と記載されている。一方で国府についての記載は少なく、国府やその周辺についても発掘調査により、明らかになったことも多い。



▲史跡出雲国府跡位置図・史跡指定範囲

出雲国府跡の発掘調査は、昭和43(1968)年～昭和45(1970)年にかけて、松江市教育委員会と奈良国立文化財研究所(当時)によって行われている。発掘調査によって、方形に区画された溝や六所神社の東側で検出された四面廂付建物跡などの計画的に配された建物跡から出雲国府跡であることが確定的になった。しかし、発掘調査に至るまでは古くは江戸時代から続く所在地論争があった。所在地論争は恩田清氏による元禄4(1691)年の大草村検地帳に「こくてう」地名の発見により、大草町説が有力となり、昭和43年の発掘調査に至ったのである。昭和43(1968)～昭和45(1970)年にかけて行われた発掘調査の成果から昭和46(1971)年に国史跡に指定された。その後、平成11(1999)年から島根県教育委員会により断続的に調査が実施されている。

昭和43～45年の調査を第1期調査、平成11～23(2011)年の調査を第2期調査、平成27(2015)年から現在まで、第3期調査が行われている。これまでの調査で、出雲国府跡は地区によって施設や機能が分かれていることが分かっている。政庁域の六所脇地区、後方官衙が所在する宮の後地区、国司館の所在する大舎原地区、国府に付随した工房の所在する日岸田地区である。先に述べたように第1期調査では、六所神社東側の政庁域で政庁正殿、もしくは後殿と考えられる四面廂付建物跡が発見されている。また、宮の後地区では文書行政が行われていたことを示す硯や墨書土器、木簡が多数出土し、掘立柱建物跡も検出されており、役人たちが実務的な作業を行う後方官衙(曹司)であったことが分かっている。第2期調査では、大舎原地区で国司館が発見されている。国司

館は出土した墨書土器から国司の中でも「介」の館であることが分かっている。また、日岸田地区では、漆付着土器や金属器生産にかかわる鞆の羽口、玉素材や砥石などが出土し、工房地区であったことが分かっている。第3期調査では、昭和の第1期調査以来となる六所脇地区の政庁域の調査が開始された。第1期調査区の再発掘なども含め、多数の調査成果がある。その中でも政庁正殿、もしくは後殿と考えられる四面廂付建物跡の再調査では、2回の建て替えが行われ、最終的には掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられていることが判明した。

私が調査担当になったのは、平成30(2018)年からの調査である。平成30年度の調査で、調査開始から50年を迎えた節目の年である。11月23日に現地説明会を開催し、多数の見学者を得ることが出来た。現地説明会の日を決定してから知ったことだが、50年前の最初の現地説明会も11月23日に開催されており、半世紀をこえたご縁を感じたものである。

発掘調査箇所は政庁域である六所脇地区である。政庁域の建物については、先ほどから述べている四面廂付建物跡が知られているものの、他の建物配置や構成が不明である。平成30年度の調査区は四面廂付建物跡の南東側を調査区とした。位置としては、東脇殿が想定されている地点である。この調査により、一辺1mを超える大型柱穴列が発見された。大型柱穴列は、南北方向に9間以上が確認されており、最低1回の建て替えが想定される。しかし、調査区内で東、もしくは西に対応する柱穴列は確認できておらず、調査区外西側に展開するものと考えられる。建物の構造は判明しなかったものの、当該箇所に大型建物跡が存在していたことが明らかとなり、今後の調査への大変貴重な発見となった。これまで不明な部分の多かった政庁域の様相が少しずつではあるが、発掘調査によって、明らかになっている。

発掘調査は今後も継続する予定で、大型建物跡の構造も明らかになり、政庁域の様相がさらに分かってくるだろう。この他にも検討が必要な課題は多い。これらの課題を発掘調査や研究などを通して、明らかにしていくことが必要である。そして、その成果を生かし広く発信できるよう、心がけて今後の調査に挑んでいきたい。



▲出雲国府跡平成30年度調査区全景(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは今福拓哉さんです。

## 考古学者の書棚

## 「岩波文庫 手仕事の日本」

柳宗悦／岩波書店(1985)

松岡 千寿

私がこの本と出会ったのは、考古学の仕事を始めて間もない頃だった。絵がある表紙と「手仕事の日本」という題名に惹かれ購入した。日本各地の手仕事について、著者のコメントの熱っぽさと挿絵の可愛さに、楽しく眺めたと記憶している。のちにこの本の著者を深く掘り下げ、自身のフィールドワークになるとはその当時、思いもしなかった。

その後、私は発掘調査の仕事から、陶芸専門の美術館へ転職し、その美術館が六古窯のひとつ、丹波焼の産地にあったため、丹波焼を研究することとなった。そして、この本の著者「柳宗悦」や「民藝」が私にとって、切っても切れない存在となる。

柳宗悦は明治22(1889)年、現在の東京都港区に生まれ、幼い頃より学習院で学び、東京帝国大学哲学科を卒業。明治43(1910)年、学習院の同級生の武者小路実篤や志賀直哉とともに文芸雑誌「白樺」を創刊し、宗教・哲学・西洋芸術などの論考を次々に発表する。朝鮮陶磁器との出会いにより、民衆の生活で使われた工芸品の美しさに目覚めた柳は、日本に残る名もなき職人が作り出した実用品の中にも驚くべき美が宿っていることを発見する。日本各地の手仕事を調査・蒐集する中で、大正14(1925)年、柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司らによって、名もなき職人の手から生み出された日常生活道具を「民藝(民衆的工藝)」と名付け、美術品に負けない美しさがあると唱え、美は生活の中にあると主張した。また、全国各地の風土から生まれ、生活に根ざした民藝には、用に即した「健全な美」が宿っていると、新しい「美の見方」や「美の価値観」を提示した。昭和11(1936)年には東京駒場に日本民藝館を開設、館長となる。ここを拠点にして数々の展覧会や各地への調査、蒐集の旅、旺盛な執筆活動を展開していった。

「手仕事の日本」は、柳が全国各地で行った手仕事の調査を若い人々に向けて平易な文章でまとめたものである。その内容は、昭和15年前後の日本の手仕事の現状を記している。柳は、「前書 手仕事の国」で以下のように記している。

「貴方がたはとくと考えられたことがあるでしょうか。今も日本が素晴らしい手仕事の国であるということ。確に見届けたその事実を広くお知らせするのが、この本の目的であります。(中略)各国で機械の発達を計ると共に、手仕事を大切にするのは、当然な理由があるといわねばなりません。西洋では「手で作ったもの」というと直ちに「良い品」を意味するようにさえなってきました。人間の手には信頼すべき性質が宿ります。欧米の事情に比べますと、日本は遙かにまだ手仕事に恵まれた国なのを気附きます。各地方にはそれぞれ特色のある品物が今も手で作られつつあります。例えば手漉きの紙や、手轆轤の焼物などが、日本ほど今も盛んに作り続けられている国は、他には稀ではないかと思われま。しかし残念なことには日本では、かえってそういう手の技が大切なもの

だという反省が行き渡っておりません。それどころか、手仕事などは時代にとり残されたものだという考えが強まってきました。そのため多くは投げやりにしてあります。このままですと手仕事は段々衰え、機械生産のみ盛になる時が来るでありますよ。」

この本では、焼物、染物、織物、塗物、手漉和紙、家具、藁細工、金物、郷土玩具など全国の手仕事の数多く紹介されている。私が住んでいる兵庫県の手仕事をみてみよう。摂津では、西宮名塩の紙、神戸有馬の人形筆、淡路は、淡路結、淡路半紙、淡路焼、淡路文楽、播磨では、明石縮、姫路金唐革、赤穂緞通 但馬は柳行李、そして丹波では丹波焼、丹後縞、丹後紬、丹後縮緬などが紹介されている。柳は、この本により地域に根ざした手仕事が日本に数多く存在することを広く世に知らしめ、これらの手仕事の発展に役立つことを願っていた。しかしながら紹介された産地で現在まで地場産業として残っている産地は少ない。その中のひとつが丹波焼なのである。

丹波焼のふるさとである兵庫県篠山市今田町立杭は、豊かな里山に囲まれた谷あい、現在でも家内制手工業的な経営をおこなう約60の窯元が軒を連ね、古いやきものの里の景観をとどめている。現在では、「日本六古窯」のひとつとして広く知られている丹波焼だが、一般に評価されたのは戦後のことで、そのきっかけが、民藝運動の指導者であった柳宗悦だった。柳は関東大震災のため、大正13(1922)年に京都に移り住み、この時期に京都の朝市で、丹波焼をはじめ、当時、「下手物」と呼ばれたさまざまな日常雑器に出会っている。この本の出版後、柳は丹波焼の蒐集にも情熱を傾け、その成果は、『丹波の古陶』として1冊の本にまとめられた。丹波焼については、「最も日本らしき品、渋さの極みを語る品、貧しさの富を示す品」と評し、当時鑑賞の対象ではなかった丹波本来の姿である日常雑器をとりあげ、自然釉を人の手の届かない他力による美として絶賛したのである。柳によって世に知られるようになった丹波焼は、現在も生活の器を作り続けている。

「民藝」が生まれてからもうすぐ100年。「生活の中に美は宿る」といった柳の思想は現代でも人々の共感を呼び、若者を中心として「手仕事」「民藝」ブームが再び起きている。芹沢銈介の美しい挿絵を眺めるだけでも楽しい本書をガイドブックに、私も全国の手仕事の産地へふらり旅に出てみたいものである。

## アルカ通信 No.188

発行日 2019年5月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp